

# ツルネン・マルテイ氏に訊く 自然に従うLuomu(ルオム)という生き方

フィンランド



「ルオムの家(Luomokoti)」と名付けたツルネン氏のご自宅は、フィンランドの大手メーカーのログハウス。化学物質が全く使われていないのでシックハウスの心配も無く、木の香りとぬくもりに癒されるエコハウスだ。

ホンカ横浜 シエスタ㈱ 設計・施工



ツルネン氏ご自宅の家庭菜園の様子。夏にはミニトマトやナス、ピーマンなどが収穫できる。もちろん無農薬で有機栽培だ。



「ツルネンの人と地球のエコライフ」  
「自然に従う生き方と農法ルオム」



税込み価格1,575円 原書房  
税込み価格1,785円 戎光祥出版



上はフィンランドの一般的なスーパーマーケット店内。左は同店内に陳列された同じメーカーの牛乳だが、中央の2本には「luomu」の表記と緑色のロゴマークが見られる。



ツルネン・マルテイ (弦念 丸呈)  
1940年フィンランド北カレリア生まれ。1967年キリスト教会の宣教師として来日し、1979年に日本に帰化。現在は参議院議員として活動し、2006年には「有機農業の推進に関する法律」を全会一致で成立させた。

「森と湖の国」と形容されるフィンランドでは、人々は子どもの頃から自然と密接な関わりを持ちながら暮らしている。例えば、「自然享受権」と呼ばれるものが法律で認められており、個人所有や国有の森であつてもすべての人が自由に入り自生するベリーやきのこなどを採取できる。また、フィンランド人の多くは森の中に別荘を所有しており、週末や夏の長期休暇には家族や仲間と連れ立って自然の中へ出かけていき、そこで過ごすのが一般的だ。個人で別荘を所有できない人のための貸別荘も多くあるという。また、市街地で家庭菜園が作られている光景も珍しくない。そんな暮らしをしているこの国の人々は、無意識のうちに自然から「生き方」を学んでいるようだ。

「ルオムのライフスタイルとは自然に従う生き方で、すなわち環境と健康に優しい生き方のことです。適度な運動、早寝早起きをし、有機農産物を中心とした食事や、環境に良い生活用品を使うことを心がけ、そして時間と心にゆとりを持つこと、これらがルオムのライフスタイルを生み出す要素だという。「ルオムといえばフィンランドでは、主に有機栽培で生産された農産物のことを指す言葉なのですが、私はそれが生き方へもつながっていると感じますね」とツルネン氏は話す。有機栽培とは、農薬や化学肥料を一切使わずに自然の力を活かして農産物を育てること、健康や環境に優しい農法であるといえる。「自然に従った農法で農産物を育てることや食べることは、ルオムの重要なライフスタイルの重要な要素だと言えます」。

フィンランドにはそれを象徴するLUOMU(ルオム)という言葉があるのだが、その由来は「自然に従う」という意味のフィンランド語Luonnnonmukainen(ルオンノンムカイネン)にある。このルオムという言葉は日本で紹介し著書も出版しているのが、フィンランド出身で現在は日本に帰化して参議院議員を務めているツルネン・マルテイ氏だ。今回、氏にフィンランドのルオムについてお話を伺った。

一方で日本に目を向けてみると、普通のスーパーではあまり有機農産物にはお目にかかれないのが現実だ。もしあつたとしても、従来の農薬を使う農法で作られた安くて規格のそろった野菜と、有機農法で作られた高くて少々いびつな同じ野菜が並んでいたら、安くて見栄えの良い方を選ぶ人が多いのではないだろうか。この理由としてツルネン氏は、多くの人々が自然に触れる機会が少なく、どのように農産物が栽培されているのかを知らないことが影響していると考えている。

日本でも、自然との関わりが希薄になりがちな都会に暮らす人々にとっては、意識的に自然と触れ合うことが大切だとツルネン氏は言う。例えば、いくつかの家族やグループで畑を借りて野菜を育てたり、家族でキャンプやハイキングに出かけたりすることは自然を身近に感じることにつながり、そうした自然の摂理を感じ取る体験をすれば、より健康的な生き方を選択できるようになるだろう。本来の自然のあり方を学ぶことは生き方を学ぶことへとつながっていく。それが、フィンランド人が自然に身に付けているルオムのライフスタイルであり、私たち日本人が今学ばなければならない生き方なのではないだろうか。

近年、日本でも健康や環境問題を意識する人が増えている中で、「LOHAS(ロハス)」という言葉を目にすることがある。環境と共存しながら健康的で持続可能な生活を追求するという意味ではルオムと共通するライフスタイルなのだが、ロハスには「その生き方をどこから学ぶか」